

「グッドガール・シンシア！ ありがとう」

日本介助犬使用者の会・会長 木村佳友 & 介助犬エルモ（2006年3月記）

今年3月14日、私のかけがえのないパートナーであるシンシアが癌のため亡くなった。昨年12月に、介助犬の仕事をエルモへ引継いで引退し、我が家のペットとしての生活を始めた矢先だった。享年12歳、人間なら70歳前後だ。

私は19年前の交通事故で、頸髄を損傷し車椅子の生活になった。その後、リハビリ訓練を経て、自宅での生活を始め、在宅勤務ながら復職もした。しかし、妻との二人暮らしで、妻は仕事に出かけるため、日中は一人で仕事をするという不自由な生活に苦勞していた。

そんな頃、シンシアは、ペットとして我が家へやってきた。

生後50日のシンシアは、無邪気で可愛く、閉じこもりがちな生活に潤いを与えてくれた。と思ったのは束の間。生後3ヶ月にもなると、自由に身動きできない私を尻目に、リモコンやフロッピーディスクを破壊する。ゴミ箱をあさって、部屋じゅうに撒き散らす。挙句は、私の昼ごはんも掠め取るようになった。シンシアに飛びかかれて、車いすごと転倒したのも1度や2度ではない。

今となっては、懐かしい思い出だが、身体が不自由な私は、シンシアのいたずらに、ほとほと手を焼き、シンシアを飼ったことを後悔していた。

そんなシンシアだったが、愛犬雑誌で偶然に見つけた介助犬の記事をきっかけに、介助犬協会（現在は、社会福祉法人・日本介助犬協会に改称）で訓練を受けることになる。

シンシアのいたずらは、自分のことをかまわなくて欲しいという気持ちの現れであり、物を持ってくることが好きな性格は、介助犬の仕事に適していた。ペットとして飼いはじめたシンシアだったが、「雷などの大音響にも動じない、乗り物酔いが無い、健康体で骨格もしっかりしている、遺伝性の疾患がない」など、介助犬に要求される素質を持っていた。

シンシアとの信頼関係を築くのに苦勞したなどの問題もあったが、96年7月にシンシアは介助犬協会から介助犬として認定された。

しかし、公的な認定ではなく、自称・介助犬でしかなかった。

当時、シンシアが日本で3番目の介助犬であったように、介助犬の認知度は極めて低く、介助犬の存在すら知らない人ばかりだった。

家では、「落とした物や指示した物を持って来る、ドアを開ける、緊急時に電話機のコードレス子機をもって来る」など、私の手足となって、不自由な生活を補助してくれる頼もしい存在だったが、外出すると、私の社会参加をサポートしてくれるはずのシンシアが、逆に大きなバリアの原因になってしまった。

介助犬はペット扱いで、スーパー、レストラン、公共施設、交通機関など、ことごとくシンシアの同伴を拒否され、外出が苦痛になった。

しかし、数少ない介助犬を同伴しなれば、介助犬への理解は深まらない。説明だけで

も聞いてもらおうと、シンシアと一緒に外出するようにした。相変わらず、同伴拒否の連続だったが、シンシアの同伴を認めてくれる施設も現れた。あるレストランでは、食事の間、シンシアがテーブルの下で静かに待機している様子を見て、入店の際はししぶぶだった店長さんが、帰る際には「お利口さんですね。聞き分けのないお子さんより、ずっとおとなしいです。こんなにいい子なら、これからも一緒に来てくださいね」と言われた。介助犬がきちんと訓練されていることを、実際に見てもらうことの重要性を実感した。

その頃から、マスコミに取り上げられる機会も増え、講演の依頼を受けるようになった。シンシアと一緒にいった講演会は、9年間で364回。北海道から九州まで、毎週のように出かけた。私が話しをしている間、シンシアは、傍らで静かに待機し、デモンストレーションでは、介助犬の役割や有効性を実地で披露してくれた。シンシアは、嬉々として私の指示に従い、電話など指示したものを持ってきてくれた。とにかく働く犬はストレスを感じながら仕事をしているなどと誤解している人がいるが、講演会に来てくれた人には、シンシアが楽しみながら介助していることを理解してもらえたと思う。

また、私の不自由な生活を補助してくれただけで感謝の気持ちで一杯なのに、「身体障害者補助犬法」の成立にも大いに貢献してくれた。シンシアがいなかったら、補助犬法の成立はもっと先になっていたかもしれない。

シンシアのちょっと垂れた目は愛嬌があり、人なつっこさが、周りの人の心を和ませ、「やさしさの輪」を広げてくれた。

シンシアと出会えなければ、素晴らしい人たちとの出会いもなかったし、こんなに充実した人生は送れなかったと思う。

「グッドガール・シンシア！ ありがとう」

---

エルモが介助犬と認定されて約5ヶ月、まだまだシンシアには及ばないが、我が家の生活にも慣れ、甘える仕草を見せるようになった。

シンシアが癌で急死し、なかなか気持ちの整理がつかないでいるが、無邪気なエルモには慰められている。

シンシアの功績に報いるためにも、エルモと一緒に頑張っていきたいと思う。